

Amelia における “Temptation Theme” について⁽¹⁾

— 試 論 —

榎 本 太

Amelia は Fielding の小説の中で最も近代小説らしさを具えたものであると言われている。近代小説といつてもむろん漠然としているのであるが、それを、たとえば一つの基準として、その叙述法における telling から showing への過程においてとらえることが出来るとすると、Amelia が Fielding の他の作品との比較において—そう近代小説的であると言われる一つの理由が示される。言うまでもなく、そのように言つても Amelia において作者が物語を語るために登場することを全くやめて、舞台から消えて物語を示したとは言えない。しかしながら Tom Jones などに示される公然たる作者の登場に較べれば、そこでは物語そのものが中心となつていないことは見逃せない。John S. Coolidge は言つている。“Instead of the exuberant creator of Tom Jones there is simply a decent sort of “man of sense” who is telling the story because he thinks it deserves telling and will venture to offer his own comments only as the story seems to call for them.” Tom Jones にあらわれている作者の ironical tone を持つ声が著しく少なくなつてゐることは誰しも気附くところである。Tom Jones を “only part novel, and there is much else — picaresque tale, comic drama, occasional essay.” と呼んだ Ian Watt のことを思えば、Amelia がそうした “part novel” からより—そう “whole nov-

el” の状態に近づいたものと考えることが出来る。

しかしながら一方においてこの Amelia は “a very argumentative novel” であり、“Enunciation of ethical principles pre-occupies the author rather more than plot, character, or dramatic effect.”⁽⁵⁾ と言われている。即ち作者が Ralph Allen にささげた献辞の最初に見られるように、“The following book is sincerely designed to promote the cause of virtue, and to expose some of the most glaring evils, as well public as private, which at present infest the country.”⁽⁶⁾ という意図が作者の主要関心事であつたことは忘れては

- (1) この論文は『英国小説研究』(第五冊)にかいた小生の「Fielding の小説における City vs. Country の主題について」の補足である。
- (2) Cf. Wayne C. Booth, *The Rhetoric of Fiction* (Chicago, 1961) pp. 3-20.
- (3) John S. Coolidge, “Fielding and “Conservation of Character”” *M. P.*, LVII (1960), reprinted in *Fielding* (ed. D. Paulson), p. 164.
- (4) Ian Watt, *The Rise of the Novel* (London, 1957) p. 288.
- (5) George Sherburn, “Fielding’s Social Outlook”, *P. Q.* (Jan. 1956) reprinted in *Eighteenth Century English Literature* (ed. James L. Clifford) (New York, 1959), p. 265.
- (6) *Amelia* (以下 Everyman’s Library 版による), xv.

ならない。作品のいたるところで示される self-love の問題、それに関連する ruling or predominant passion の問題に関する議論はこの作品を Sherburn が言つたように “argumentative novel” として又 “the most intellectual of his stories” と考えることが極めて適切なことのように思われる。

ところで一方では *Tom Jones* などよりも物語そのものが中心となり小説的になつたという見解と、他方では議論的であり、そのため物語の筋よりも倫理的道德的な主張に力点があるという見方とは奇妙にも対立し、反対の方向を指し示しているようにも考えられる。同じ小説に関して、しかも相当適確に問題を把握していると考えられるこうした意見が実は奇妙なちぐはぐな方向を指すように思われるのはどうしてであろうか。そこにこの作品の問題があるように思われる。そしてそこで我々はこの作品の主題の seriousness ということをどうしても考えざるを得なくなる。勿論 *Joseph Andrews* にしても *Tom Jones* にしてもその主題に serious な意図がないわけではない。むしろそうした意図は中心にあつたことは事実である。にも拘らず通常それは喜劇的なふざけた衣裳をまとうて居り、そうした衣裳を通して語るだけの余裕と距離感を作者は持つていた。それは対象が作者の持つ喜劇的人生観を支える秩序の意識で余裕をもつて描けるような田舎の社会を主としたからであつたとも言えよう。一たん都会生活を対象とするとその描写に余裕がなくなり serious な調子が一そうあらわに出されていた。*Tom Jones* の後半、London での episode にはそうした調子が強く見られる。具体的にそれではこの小説の主題とは何であろうか。

この作品の mottoes としてかゝつてある Horace と Simonides の言葉が作者のこの

作品に関する意図を一応示しているように思われる。それはラテン語、ギリシャ語のまゝ示されて居り、この書の intellectual な性質を示しているのだが、それは夫々英訳すると “Thrice happy, and more (than thrice happy), are those whom an unbroken bond hold.” と “A man gains no possession better than a good woman, nothing more horrible than a bad one.” ということになる。即ち夫婦の幸福と女性の美德について讃美されているのである。

ところでもう一つこの小説について Fielding の言つていることでよく引きあいに出されるのは、彼が *Covent Garden Journal*, 28 January, 1752. に書いている “Neither Homer nor Virgil pursued them (= Rules) with greater Care than myself, and the candid and learned Reader will see that the latter was the noble model, which I made use of on this Occasion.”⁽¹⁾ 即ち Fielding にとつては *Amelia* の “noble model” は Virgil の *Aeneid* であつたという言葉である。最初の数巻に見られる筋の運びは特に *Aeneid* のそれを思い出させる。様々な事件その他の parallelism は既に指摘されているが、Dido と Miss Matthews, Aeneas と Captain Booth, Turnus と或る貴族——名前のないまゝなので the Noble Lord として置く⁽²⁾——の対比などがその著しいものである。一体 Virgil は Renaissance 以後のヨーロッパ文学にとつ

(1) Quoted by George Sherburn, “*Amelia: An Interpretation.*” *E. L. H. III* (1936), p. 3

(2) See also Maurice Johnson, *Fielding's Art of Fiction* (Philadelphia, 1961) pp. 141-156.

て一つの大きな inspiration の源泉であつたし、しかも単に物語として以上にそこに精神的な道徳的な意味を附与して考えられていた。Moral reform の意図は Virgil から Renaissance の叙事詩人の中に受け継がれていることは C. M. Bowra などの述べているところである。Fielding の場合も Virgil を “noble model” としてその構成、即ち叙事詩的な “cut-back” とか episode といったものによる類似を示したという以上に、更に “moral reform” の意図をも Virgil 的叙事詩の特質から受け継いでいるとも考えられる。Fielding の知的に受け継いでいたヨーロッパ文学の伝統がこゝにも知られる。そしてこの散文による叙事詩は、George Sherburn によれば、“private history done with fidelity to the facts of everyday life”⁽²⁾ となつているという。Sherburn はこうした serious な意図からこの作品の主題として Captain Booth の conversion とそれと平行して上流社会——Captain Booth の価値を認めない——に対する批判という二つの主題を引き出している。

Captain Booth の conversion の主題は最初の場面で Newgate で会つた Robertson を deist であると述べ、その後で、

And as to Mr. Booth, though he was in his heart an extreme well-wisher to religion (for he was an honest man), yet his notions of it were very slight and uncertain. To say the truth, he was in the wavering condition.⁽³⁾

という Booth 自身の宗教に対する態度に言及される頃から問題となつている。即ち彼は “a disadvantageous opinion of Providence” におちいり “Every man acted merely from the force of that passion which was uppermost in his mind, and

could do no otherwise.⁽⁴⁾ と信じているのである。こうした Booth の考えは Miss Matthews に対して、“That the doctrine of the passions had been always his favourite study; that he was convinced every man acted entirely from that passion which was uppermost.” と答える場合を始めとして、多くの場面で繰返し語られている。言うまでもなく ruling or predominant passion というのは当時の人間の character について、人間の性格というものとの関連において多く語られた言葉である。Pope の “Search then the ruling passion” を始め *Essay on Man* での言及から Godwin などにいたるまで散見する古い humour の説から発したこの predominant passion の考え自体が特に Christianity や宗教と矛盾したものを持つてはいない。Puritan 的な Richardson もしばしば predominant passion について言及している。それは丁度 Miss Matthews について “Vanity is plainly her predominant passion.” という場合のようにその character の特質を示すものとして用いられている。Booth をして Fielding が “I never was a rash disbeliever; my chief doubt was founded on this, that as men appeared me to act entirely from their passions, their actions could have neither merit nor demerit.”⁽⁷⁾ と言わしめる

(1) C. M. Bowra, *From Virgil to Milton* (London, 1945) *passim* esp. chap. I.

(2) George Sherburn, “*Amelia: An Interpretation*” p. 2.

(3) I, iii, p. 14.

(4) I, iii, p. 15.

(5) III, iv, p. 108.

(6) IV, vi, p. 187.

(7) XII, v, p. 288.

時、彼は Booth の deism 的な determinism 即ち神の摂理とそれに導かれる 理性と意志の力を認めないことを問題としているのである。最後のところで Booth は執達吏の sponging-house で Dr. Harrison に対して言う次の言葉は上述の彼の考えに対する conversion であることは明かである。

“ Since I have been in this wretched place I have employed my time almost entirely in reading over a series of sermons which are contained in that book (meaning Dr. Barrow's works, which then lay on the table before him) in proof of the Christian religion; and so good an effect have they had upon me, that I shall, I believe, be the better man for them as long as I live...”⁽¹⁾

丁度 *Tom Jones* において主人公 Tom が prudence と religion が不足しているということを Allworthy に言われて、後にそれらを得るといふ主題があつたと同じように、この小説において Booth は passion 説による determinism を信ずることから宗教心を遠去かっていたのを、様々な体験から宗教心を得るのである。これを conversion というのは適当ではないかも知れないが、ともかくそのような形で宗教心を得るのである。それは突然最後に都合よく変つたというのではなく多くの対比を通して前以てよく準備されたものであつた。たとえば最初の Newgate の場面では Robertson の deism と共に別の methodist を登場させ、作者の信ずる latitudinarianism と対比させているのが注目される。そして deism を語る場合 Dr. Barrow と共に当時の latitudinarian divines の一人である Dr. Clarke の名前が言及されているのである。Booth の最後に

おける conversion は既にその対比と言及から察せられるのであるが、更に後には、Miss Matthews の Mandeville 的な考え——彼⁽²⁾の女は “ that charming fellow Mandevill ” という——とも、又 Colonel James の sceptic な考え方も対比させて Booth を反撥させたり反省させたりする機会を与えている。James については、

Bob James can never be supposed to act from any motives of virtue or religion, since he constantly laughs at both; and yet his conduct towards me alone demonstrate a degree of goodness...⁽³⁾

と言われている。Booth にとつては James の goodness についての判断はむろん誤であつたのだが、‘virtue or religion’ を無視する James に対しては当然批判的になつているのである。

こうして様々な体験を経て宗教心を得る Booth を中心とした主題は Sherburne によるもう一つの流階級批判、特に Booth の長所を認めようとしない点を中心として流階級の腐敗を鋭く批判している諷刺的な主題と併存する。特にそれは Colonel James や The Noble Lord に対する批判を中心とする。Book XI の chap ii における或る貴族 (The Noble Lord とは別人) と Dr. Harrison との対話も上流の腐敗をついていく。そこで Booth が有為な青年であることを説いて、職につかせるようにその貴族に頼んだ Dr. Harrison に対して貴族は選挙運動を利用しようとするのである。対話は次のようになされる。

“ Do you not know, doctor, that this

(1) XII, v., p. 287.

(2) III, v, p. 114.

(3) III, v, pp. 113-114.

is as corrupt a nation as ever existed under the sun? And would you think of governing such a people by the strict principles of honesty and morality?"

"If it be so corrupt," said the doctor, I think it is high time amend it...

"...I see nothing but religion, which would have prevented this decrepit state of the constitution, should prevent a man of spirit from hanging himself out of the way of so wretched a contemplation."⁽¹⁾

こうして上流階級の批判は Booth の conversion の主題と重なって Christian theme の一環となると考えられる。

Sherburn の解釈は極めてすぐれて居り、たとえば conversion を少し軽く見すぎていると思われる Digeon の考えなどよりも一段すぐれている。そして現在 *Amelia* の解釈は Sherburn の上述の説を無視しては実際不可能である。それ故彼の説の問題点を多少詳しく自分なりに論じたのだが、私は彼とは別な角度から、しかも殆んど同じような Christian theme をとり出して論ずることが出来るのではないかと考える。彼の議論の初めに出される *Amelia* と *Aeneid* との対比はその議論にあたって決して無関係ではないと思われる。というのはその serious な目的という他に、Booth 対 *Aeneas* ということを初めから考えることによつて *Amelia* の主人公乃至中心人物は *Amelia* ではなくて Booth であると殆んど何等の疑問なしに考えさせてしまうからである。ところが果してそれでいゝのだろうか。Fielding は Richardson と異つて男性を画くのが得意であり、結局この作品でも *Amelia* は充分画くことが出来ず、Booth を中心とした物語とな

つている、と解釈せざるを得ないのだろうか。

Digeon はこの作品を解釈する上で興味深い指摘をしている。即ちこの作品の欠点と考えられる一つとして 'the centre of interest' と 'the centre of action' とが一致していないというのである。'the centre of interest' とは言うまでもなく *Amelia* である。彼女は直接には Book IV Chap. ii に Newgate にいる Booth の許にあらわれることになるのだが、Book II の初めから Booth が Miss Matthews に語る身の上話を通して中心的な関心になっていることは言うまでもない。そして若し Book II 以後の部分における *Amelia* に対する関心の重要性を気付く時、Book I における Miss Matthews の身の上話は後の *Amelia* の物語との著しい対比によつて見事な効果を示していることを知る。即ち Book I における Miss Matthews の身の上話は Book II 以後の *Amelia* を中心とする物語の準備として考えられるのである。このように考えるとこの小説全巻における 'the centre of interest' はおのずから明かである。ところが Digeon の言うように 'the centre of action' ということになると、Book I においては全然言及もされず、Book II の初めにいたつてようやく名前が示され、物語に直接参加するのは Book IV 以後である *Amelia* は中心的位置から退くように思われる。Booth が 'the centre of action' であることは明白であると考えられる。そこで 'the centre of action' を主人公的位置にすえて考えるのは極めてこれも当然のように思われる。Digeon は明敏にもこのこと、即ち "the

(1) XI, ii, pp. 228-29.

(2) Aurelien Digeon, *The Novels of Fielding* (New York, 1962) p. 214.

(3) Aurelian Digeon, *op. cit.*, p. 206.

centre of interest is not always the centre of action” ということをこの小説について感じ、それで “The result is a certain awkwardness, a slight lack of balance, as it were, in the construction.” と考えている。もち論この主人公を夫婦として、全体にわたる ‘matrimonial theme’ を考えることが可能である。しかし物語としてこの小説を考える時、結婚生活における妻の duty をえがいたという観点からは *Pamela* の続篇と同じようにこの小説を考えてしまうことになり多くの不満を残すこととなる。

しかしながら先に述べた *Amelia* の巻頭の mottoes をこゝでもう一度ふり返つて見ると、夫婦、特に美德を持った妻としての *Amelia* が中心でなければならなくなる。実際の作品の中で Booth は決して主人公らしい人物としてえがかれていない。彼の善良さは *Tom Jones* の場合のように行為となつて積極的に示されるというよりも、negative な面として真実を見通すことの出来ないごまかされ易さとか、思慮のなさとか、意志の弱さ、とかいつた面で示されるのみで、積極的な面として示され、hero として考えられる点が残んどない。そうしたところから Digeon が不安をもらしていたように、その conversion を我々が本当にあてにしてよいのか気になる点があるのである。それに反して *Amelia* は “the heroic part of the female character”⁽¹⁾ と言われているように正に heroine として存在するといつてもよい。冒頭の章で

To retrieve the ill consequences of a foolish conduct, and by struggling manfully with distress to subdue it, is one of the noblest efforts of wisdom and virtue.⁽²⁾

といつているのを作品自体にあてはめてみると、‘struggling manfully with distress to subdue it’ というのは Booth の行為と見ることが出来ない。‘manfully’ というには奇妙かも知れないが当然 *Amelia* の行為に対するものである。そして ‘a foolish conduct’ は言うまでもなく、Booth によつてなされるのである。

さてこのように heroine としての *Amelia* を中心として、従つて *Aeneid* の構成にはよらないで、小説全体の構成を考えて見る。すると先程述べた Book I における Miss Matthews と Book II 以後に見られる *Amelia* との行為の対比ということが頭に浮ぶ。それではその対比というのはどんなものであろうか。悪い女と淑徳の女という対立と言つてしまえるかも知れない。或いは Cleopatra 型の女と Octavia 型の女の対比といえるかも知れない。実際 Miss Matthews は Cleopatra にたとえられている。そしてこの二つの型の対比はよく当時の小説の主題となつている。Fielding の妹 Sarah の小説にも *The Lives of Cleopatra and Octavia* がその対比をえがいている。しかし対比の中から *Amelia* を中心とした主題を考える場合、Miss Matthews の身の上話は失敗の話である。恋人 Hebberts に裏切られた失敗談なのである。そこで彼女が言つて

Indeed, women cannot be cautioned too much against such lovers; for though I have heard, and perhaps truly, of some of our sex, of a virtue so exalted, that it is proof against every temptation; yet the generality, I am

(1) IX, ii, p. 118.

(2) I, i, p. 3.

afraid, are too much in the power of a man to whom they have owned an affection.⁽¹⁾

そして彼女自身の経験から更に一般的に概括して次のように語る。

O may my fate be a warning to every woman to keep her innocence, to resist every temptation, since she is certain to repent of the foolish bargain. May it be a warning to her to deal with mankind with care and caution; to shun the least approaches of dishonour, and never to confide too much in the honesty of a man, nor in her own strength, where she has so much at stake; let her remember she walks on a precipice, and the bottomless pit is to receive her if she slips; nay if she makes but one false step.⁽²⁾

これは Miss Matthews が Booth に語った話の一節だが、当然 Fielding は Amelia の後の temptations を頭に置いていたと思われる。Miss Matthews の話の中心的な問題をこのように temptation に負けた女の失敗談として考えると、更に Book VII 全巻を殆んど占めている Mrs. Bennet 即ち Mrs. Atkinson の身の上話もやはりそうした同類の話として Miss Matthews よりは同情的に考えられる女の temptation に負けた話ともとれるのである。

このように見て来ると一つの主題が明かになつて来たように思われる。即ち Amelia を中心とした temptation の主題である。勿論 temptation という時 Amelia が tempt するのではなくて、彼女は tempt されるのである。そこに行動における Amelia の受身的性格が示されている。彼女に対する temptation が主題である場合少くとも表面的に

は彼女は 'centre of action' とはならない。彼女の行動は受身的性格を持つからである。そしてこのような主題を考えた時、我々は又 Booth の conversion の主題と同様 Christian theme がそこにあることを知るのである。言うまでもなく "Temptations in the Wilderness" 「荒野の試み」という主題である。

Amelia を Christian heroine と考えるのは現在我々がこの物語を読む場合以上にもつと切実に身近かに十八世紀の読者——否それ以上に作者——が感じたであろうと思われる。先ず十八世紀前半における Christian hero への関心を我々は知らねばならぬ。Richard Steele の *The Christian Hero: An Argument Proving that No Principles but Those of Religion are Sufficient to Make a Great Man* (1701) があることは既によく知られている。Steele は更に Christian hero を具現化した人物として Sir John Bevil を *The Conscious Lovers* (1722) の中に示した。当時の書評は Bevil のことを "Christian Hero as truly represented in the Drama" といっている。その他 George Lillo の *Scanderbeg: The Christian Hero* などもある。Christian hero の考えは十八世紀の前半において "unusual popularity" を得ていたと Martin C. Battestin も述べている。⁽³⁾ 言うまでもなく *Joseph Andrews* や *Tom Jones* においても Christian hero は Parson Adams や Squire Allworthy などとなつて示されている。更に Richardson の場合は

(1) I, viii, p. 36.

(2) I, viii, p. 37.

(3) Martin C. Battestin, *The Moral Basis of Fielding's Art* (Middletown, 1959) p. 29.

Pamelaにしても Clarissaにしても Christian heroine としてえがかれている。Clarissaは特に Christian tragedyであるという点はその Postscript において強調されている。Clarissaの Christian heroine としての面を考えてみると作家として Clarissa を賞讃した Fielding の中に、それに対抗する Christian heroine を Amelia において創造したと考えることは容易である。特に seduction theme という点から Clarissa を考えると temptation はそこでも大変重要な関心となつてゐることは言うまでもない。Clarissa に対して優るとも劣らない Christian heroine による temptation の主題を扱つた小説は、作家としての彼を考えると、それはもう必然的とさえ思える位である。それ故この Amelia の Christian heroine としての temptation theme に較べれば Booth の conversion の主題はいわば附屬的に考えてもいゝとさえ言えるであらう。彼女の宗教的性質は明に示されている。

This admirable woman never let a day pass without instructing her children in some lesson of religion and morality.⁽¹⁾

又夫 Booth の passion 説に対する信仰に不安をいだいて時に忠告する。

"I have often wished, my dear," cries Amelia, "to hear you converse with Dr. Harrison on this subject; for I am sure he would convince you, though I can't, that there are really such things as religion and virtue."

This was not the first hint of this kind which Amelia had given; for she sometimes apprehended from his discourse that he was little better than an atheist: a consideration which did

not diminish her affection for him, but gave her great uneasiness.⁽²⁾

こゝで彼女の Christian heroine としての temptation theme は Booth の conversion theme と関係しているのを感じず。しかし Amelia 自身も多くの temptations の中で信仰に対して不安をいだく時がある。

"Indeed, my dear sir, I begin to grow entirely sick of it," cries Amelia; "for sure all mankind almost are villains in their hearts."⁽³⁾

しかしこうした場合には Dr. Harrison が彼女を勇気づける。Dr. Harrison は Parson Adams をもつと大人しくしたような典型的なすぐれた牧師となつてゐる。様々な点で Parson Adams を思い出させる面を持つてゐるが、この人物が Amelia の導きとなつてゐるのである。そして彼は Amelia のことを

She hath a sweetness of temper, a generosity of spirit, an openness of heart—in a word, she hath a true Christian disposition. I may call her an Israelite indeed, in whom there is no guile.⁽⁴⁾

といつてゐるのも興味深い。

このような Christian heroine としての Amelia が明にされると、次にその temptations が行われる荒野 (wilderness) が setting として考えられねばならぬ。言うまでもなく荒野としての London なのである。London は Fielding の作品においても、又他の作家の作品においても、evil, vice, luxury の symbol としてえがかれている。

(1) IV, iii, pp. 174-5.

(2) X, ix, p. 214-15.

(3) IX, v, p. 131.

(4) IX, viii, p. 146

十八世紀初めより急速にすゝんだ urbanization は London を 'bad place' として考えさせるようになる。作家は、たとえば Richardson にしても、Smollett にしても、Goldsmith にしても、その点一致している。Joseph Andrews の Mr. Wilson は London の悪を離れて田舎で清らかな余生を送っている。Tom Jones の中の The Man of the Hill は都会を嫌って山の中に人を避けて隠退している。主人公達は Fielding においては田舎の生活を楽しみ、London へは出ないという言葉で終っている。これは古典的な理想を一面において示したものではあるが、同時に当時の London と上流階級の腐敗に対する治安官としての Fielding の考えが示されているといつてよいだろう。特にこの小説の前に書かれた *Enquiry into the Causes of the Increase of Robbers* の中では London について次のように書かれている。

Whoever indeed considers the cities of London and Westminster, with the late vast addition of their suburbs, the great irregularity of their buildings, the immense number of lanes, alleys, courts, and bye-places; must think, that, had they been intended for the very purpose of concealment, they could scarce have been better contrived. Upon such a view, the whole appears as a vast wood or forest, in which the thief may harbour with as great security as wild beasts do in the deserts of Africa or Arabia; for, by wandering from one place to another, and often shifting his quarters, he may almost avoid the possibility of being discovered⁽¹⁾...

即ち London は大きな森にも、又 Africa

や Arabia の砂漠にもたとえられて、そこでは悪が跳梁するまゝになつてゐる。このような譬は荒野 (wilderness) という形でも容易になされるものであろう。たとえば Smollett には次のような表現がある。

London being an immense wilderness, in which there is neither watch nor ward of any signification, nor any order or police, affords them (=thieves and sharpers) lurking places as well as prey.⁽²⁾

Booth 夫妻が出て来た London もこのような荒野 'wilderness' であり、人を救わんとして却つて捕えられて Newgate へ入れられた Booth は早速 Miss Matthews の誘惑に陥つてしまう。

さてこのような荒野における temptation であるが、Dudden は Amelia が三種類の試験を受けると言つてゐる。即ち、(1) 'disadvantage of extreme poverty' (2) 'insidious attempts of vicious men to rob her of her virtue' (3) 'the weakness and stupidity of an improvident husband' の三つである。三種類の trials というのは言うまでもなく、これも Christian theme と合致する。但し Dudden が述べてゐるのが夫々別々に三回あらわれるというよりは、むしろその三つが或程度混合して、三度あら

(1) *An Enquiry into the Cause of the Late Increase of Robbers, etc. With Some Proposals for Remedying this Growing Evil* (London, 1751) p. 76 in *Johnson's London*, ed. Roland Bartel (Boston, 1956) p. 56.

(2) *Humphry Clinker* (Rinehart Ed.) p. 99.

(3) F. Homes Dudden, *Henry Fielding: His Life, Works, and Times*, (Oxford, 1952), II, p. 822.

われているといつてよいであろう。Amelia に対する試練は先ず第一に the Noble Lord を中心として、その手先となっている Mrs. Ellison によつてなされる。富と地位と見せかけの寛大さによつて彼は Amelia を巧みに誘惑しようとする。彼女はそこで Eve にたとえられて Milton の引用と共に示されているのは temptation theme を考えると興味深い。即ち

—Adorn'd

With what all Earth or Heaven
could bestow
To make her amiable…⁽¹⁾

などである。Amelia はこゝでは明かに Eve と同じように temptation に陥らんとする人間としてえがかれている。もち論彼女は Eve と異つて Mrs. Bennet の好意ある体験談と忠告によつてこの第一の危機を脱する。第二は Colonel James による Amelia の virtue への試みである。これは最初の Booth と Miss Matthews との関係が尾を引いているし、又第一の場合と同様 Booth の求職ということとも関係する。しかし前の場合と異り Amelia は James の意図を感じて居り、“I will do the duty of a wife, and that is, to attend her husband wherever he goes.”⁽²⁾といつて Booth の考えに従おうとしない。そして結局 Dr. Harrison や Mrs. Atkinson の好意ある機転によつてこの第二の危機も脱する。第三は the Noble Lord の手先となっている Booth のかつての友 Captain Trent に誘惑されて、結局事は彼等の思うつばに入り、Booth は三たび執達吏に捕えられる。一方その間 James も再びこの機会に Amelia を試みようとする。この危機において Dr. Harrison は ‘religion and virtue’ を強調する。こうした折柄、Booth の conversion

があり、次いで Robertson の告白と共に彼女に対する temptations も終り、彼等は田舎の家へ帰ることが出来ることになる。物語は四月一日から始まっているが大体五月の中頃まで続いていると考えられる。正確に四十日ということは出来ないがそれ位の日数が Amelia の London での滞在の日数と考えてもよいと思われる。Christ の四十日にわたる荒野の試みと略々同じ期間と見てよい。最初と最後のところで deist である Robertson を登場させて前後をしめくづつているのも、極めて Fielding らしい配慮であるが、秩序立つた構成を示している。更に構成の上から言えば Amelia の三つの temptations に対して、それと夫々多少の関係をもつて三回の Booth のたい捕がなされ、そのたい捕と強い関係を持つて Booth の女性とか決斗とかとばくの誘惑に対する敗北がある。その敗北が Amelia の fortitude と鋭い対立をなして示されているのである。

この中心的な主題をめぐつてすべての脇役的人物が配置されていると考えられる。あいまいだとされている Mrs. Bennet 即ち Mrs. Atkinson は丁度 *Tom Jones* の Mrs. Waters のように全体として主題を支える同情的人物ではあるが、他面その学者ぶつた点、時に Amelia にとつて勝手だと思われることをするなど、この主題の中からあいまいであつても適切な位置を占めるように思われる。そしてこの主題を考えることによつてのみ従来殆んどいつも問題とされ、非難されて来た結末が特に意味を以て考えられるのではないだろうか。彼等は London から田舎へかえることによつて結末を得なければならぬ。荒

(1) VI, i, p. 258; quoted from *Paradise Lost*, VIII, 482-484.

(2) IX, iv, p. 126.

野の temptations が終り Christian hero の勝利と共に彼は荒野を去らなければならぬ。tempters である the Noble Lord や James たちを荒野に残したまゝ、即ち彼等は別に convert することなしにである。Social reform を主題と考える場合、その点に関して作者がとつた態度は明確さを欠くとも言われて来たが、そのような点に関してこの主題は或る程度解答をあたえてくれるのではないだろうか。

この主題は又私に Milton の *Paradise Regained* を思い出させる。Milton を Homer や Virgil と共に尊敬していた Fielding のことである。彼は *Paradise Regained* を通してこの temptation theme とその pattern を考えていたのかも知れないと考えることも出来る。この小説が多少共近代

小説的であるというなら、それは *Aeneid* の pattern に従つたという点からではなくて、むしろ temptation theme を支える神話の validity によるものではないだろうか。*Amelia* において Fielding は従来の彼の手法をすてて新しい脱皮を近代小説創造という方向でなつてゐるということを我々ほどの程度考えていいのかわからない。その方向を余りにも強調するのは多分誤りであろう。Fielding 特有の諷刺的で喜劇的な tone はこの作品にも著しく見ることが出来る。にも拘らずこの主題を通して前面に出された一そしてこうした主題を通してのみ明かにされることの出来るような一 seriousness とそれに伴う手法上の変化はやはり小説の展開上注目すべきものであろう。